報告

近代京城の「都市韓屋」，その過去と現在

金　　容　範
KIM, Young Bum

1. 序

「都市韓屋」とは，主に，近代京城の鐘路通一帯をはじめとして，「北村」と呼ばれる朝鮮人密集地区に建てられていた「韓屋［ハンオク］」を指すものである．朝鮮王朝時代まで持続されてきた朝鮮の独特な構造と装飾を持つ韓屋が，20 世紀初頭から行われていた急速な都市化に沿って伝統の生活様式を継承しながら，新しい住宅思想の発想や新建材の採用に従い，新たな都市住宅として変化したものだと言われる．時代的に言うと，1920 年後半から京城の都心部に登場し，次々に都市の外郭地域の開発された新住宅地に建てられながら，1960 年代まで都市全域に渡って広まっていた．すなわち，都市韓屋は，近代の変革期の中で，朝鮮人の典型的な都市住宅として普及したといえる．

本稿は，学術交流提携記念として開かれた 2011 年度非文字資料研究センター第 1 回公開研究会「京城の都市・建築そして生活」で発表した報告内容に加えて，現存する都市韓屋に見られる居住者の生活の変化とそれに従って行われた増・改築の現状を紹介したものである．

2. 都市韓屋の名称と意味

都市韓屋は，学者や研究主題によって「都市型韓屋」，「改良韓屋」，「近代韓屋」，または「집장수집［ジッチャンサジプ］」といった異なる名称で呼ばれる．こうした名称には都市韓屋の特質が明らかに表れている．

「都市型韓屋」とは，韓屋の都心部での立地環境に着目し，住宅地として整えられた都市韓屋群を構成する単位という意味合いが強いものである．日本統治時代に入って朝鮮総督府の主導のもとに行われた市街地整備や都市計画に伴った都市韓屋地の変化に注目しながら，都市史の側面から都市韓屋の成立経緯を重視しているのである．

また，「改良韓屋」とは，伝統的な韓屋の住宅様式に基づいて，ライフスタイルの変化に合わせるように間取りや設備などの改善を試した改良住宅としての機能性を強調したものである．それは，1920 年代初頭から行われた生活改善や住宅改良の世論との関係が深い．朝鮮人建築家が韓屋の住宅様式に基づいた改良住宅案を発表したり，住宅作品をデザインしたこともあり，こうした生活改善に向けた社会的な気勢に伴い，改良韓屋は，より便利な生活を営むように改良された韓屋という認識から命名されたのである．加えて，セメント，煉瓦，トタン，ガラスなどの新しい建材が用いられ，こうした認識をもっと高めたという．なお，「近代韓屋」とは，単に都市韓屋が建設された時代を示すものでもあり，在来の韓屋とを区別して近代住宅の一つの類型として命名されているものである．

また，都市韓屋が当時の人々によって日常的に呼ばれた言葉として「ジッチャンサジプ」のハングル名がある．それは，民間業者の建売住宅という意味として，都市韓屋建設の主催や供給方式を示している．近代期の韓屋建設にあたって，民間の住宅地開発業者が敷地を買い入れて少なくとも 6〜7 軒の韓屋を建て，大量に供給するのが一般的であったという．「ジッチャンサジプ」は，専門の建築家というより非専門の業者が作った住宅というやや低級な見方が内包されている．

このように，都市韓屋に関する様々な名称が使われてきたが，現在は，本稿のように，「都市韓屋」あるいは「近代韓屋」の名称がより日常的に使われている．

3. 都市韓屋の成立背景

近代京城における都市韓屋の建設には，京城の都市計画の実施，京城住民の増加，民間の住宅地開発業者の登場などがそれぞれの背景になっている．とりわけ，日本統治時代が始まった1910年直後から行われた市街地整備による街区と街路の変容と，それに伴った朝鮮人住宅地の移り変わりが最も重要なきっかけになったと考えられる．

3.1. 京城近代都市計画の導入と朝鮮人住宅地の分布変化

「南村」と「北村」という二重構造で大別される近代京城の都市空間は，日本統治時代以前から形成されてきた．1885年に日本と朝鮮間の漢城条約が締結され，日本人の漢城（朝鮮王朝時代のソウルの地名）内の居住が許可されると，南山の麓に建てられた日本公使館を拠点に日本人の居留地が形成され始めた．日本人の居住地域は，次々に本町（現，明洞）から南大門通へと拡大され，1905年の日露戦争後には，漢城内の日本人の人口が爆発的に増加していった（図1）．さらに，1910年の日韓併合直後に，日本人の居住地域の拡大に応じて京城の都市計画とその整備事業が行われた．

図1　南山の朝鮮神宮から望んだ1930年代の京城都心部の全景（『写真で見る近代韓国』，1986）

図2　（京149）（朝鮮名所）京城朝鮮人町（絵はがき，年代不明）

図3　市街地整備後に変容された1910年の鐘路通（『写真で見る百年前の韓国』，1997）

初期事業の骨子は，景福宮内に建設される朝鮮総督府から京城府庁と南大門を経由して京城駅に至る幹線道路や，また京城府庁から東側の東大門まで延びる幹線道路など，京城の東西南北を連結する直線道路を施工することである．こうして，京城の南側は日本人町が建てられた「南村」，一方での北側は，景福宮や昌徳宮の周辺一帯と鐘路通を中心とした朝鮮人の「北村」が形成されてきたのである．（図2，3）

ところで，都市韓屋住宅地として最もよく知られている「北村韓屋村」は，1977年に韓屋保存地区として指定され，美観地区として高さ制限などが決められていたり，都市韓屋を活かした観光地になっている．「北村韓屋村」が置かれている嘉会洞（カヒェイドン）と桂洞（ゲドン）は，むかしから王族を中心とした上級官吏や両班（ヤンバン・朝鮮王朝時代の貴族層）の居住地とされていた．鍾路通よりやや北に寄って，地理的にも景福宮と昌徳宮に囲まれた要地であるため，最も歴史の長い金持ちの町であるという（図4）．また，技術者の中級官吏である中人層の居住地は，景福宮から西側の一帯 —— 内資洞（ネザドン），通義洞（トンイドン），社稷洞（サジッドン）など —— に形成

図 4　1901 年の漢城府地図に表れた「北村」

図 5　嘉会洞の斜面地に建てられた都市韓屋群の風景（『モダン朝鮮』，1939）

されており，庶民たちは，その下の鍾路通の一帯に集まって住んでいた．

このような朝鮮人の住宅地分布は，1910 年代初めまで維持されたと推測できるが，その状況は，1913 年の朝鮮総督府の「市街地建築取締規則」の公布後に変わり始めた．都心部の大規模な敷地の再開発や，残された斜面地を住宅地として造成したことによって，新たな朝鮮人住宅地が形成されていった（図 5）．例えば，嘉会洞と三清洞（サムチョンドン），桂洞などにあった大規模な邸宅地が 150～250 平方メートルの敷地に分割されて整理された．また，1934 年の「朝鮮市街地計画令」の公布後に行われた土地区画整理事業による京城四大門の外郭地域で新しい住宅地が形成され，近代的な格子形の都市韓屋住宅地が誕生した（図 6）．

一方で，このような住宅地の変容に伴って朝鮮人の住宅地の移り変えが始まっていたが，1930 年代には，明倫（ミョンニュン）町，恵化（ヘファ）町，新堂（シンダン）町など，朝鮮人上流層の日本人の居住地への移住が目立っていた．すなわち，民族別にはっきりと分化されていた上流層の居住地が相当に混在されていったと考えられる．それは，日本統治時代における朝鮮社会の上流層を占めた朝鮮人たちは旧朝鮮王朝時代の官吏や両班ではなく，企業家などの新しく成長した新中産層に変わっていたのである．

3.2. 都市韓屋の供給方式……商品住宅の登場

京城住民の人口は，1910 年の日韓併合以後，次々に増加していく．それは，日本人住民の増加だけでは

図 6　祭基洞（ゼギドン）都市韓屋地区の配置図（1991 年作成）

表1　京城府の人口及び住居数（『朝鮮年鑑』，1926～1945）

年　度	国　籍	人　口	世帯数	住居数
1926	朝鮮人	215,960	68,862	64,889
	日本人	77,587		
	外国人	3,918		
1934	朝鮮人	261,232	77,701	69,453
	日本人	100,323		
	外国人	3,877		
1935	朝鮮人	270,590	54,226	46,012
	日本人	106,782	24,388	23,719
	外国人	5,119	905	868
1936	朝鮮人	279,003	68,186	—
	日本人	109,672		
	外国人	5,836		
1941	朝鮮人	815,154	138,196	—
	日本人	154,583	34,012	
	外国人	5,196	954	
1945	朝鮮人	941,101	156,015	—
	日本人	167,340	36,583	
	外国人	5,563	1,012	

なく，農村部から朝鮮人住民の急速な流入が主要な原因になった．植民地圧政下で農地を失った農民の転出や，就学移住など，大量の住民が京城に流入し，朝鮮人住民の住宅不足は深刻な社会問題となっていた．〈表1〉は，京城日報社と毎日新報社が1926年から1948年まで共同で発行した『朝鮮年鑑』に記された京城府の人口及び住居数に関する調査値をまとめたものである．この〈表1〉によると，1926年の朝鮮人の住宅不足率は5.77%であったが，1930年代の住宅不足率は平均18%まで上がっていることがわかる．また，1935年の記録には，日本人の住宅不足率は2.75%（699棟）に過ぎない反面，朝鮮人の場合は，15%（8,214棟）以上で大きな違いになっている．これらの朝鮮人の住宅不足は年々続き，1945年には，およそ40%の住宅不足率を表している．

このような朝鮮人の住宅不足の問題は，住宅需要の増加を引き起こし，それに応じて大量に供給できる都市韓屋が重要な役割を担ったといえる．言いかえれば，民間の住宅地開発業者によって供給された都市韓屋が「商品住宅」として受容できる与件が形成されたのである．それで，小規模の宅地で整備された「北村」は，住宅地開発業者の主要な活動舞台になって，都市韓屋が短期間に供給されていった．

なお，都市韓屋の建設方式は，敷地の所有主と大工が結んだ小規模の組織によって建設するのが一般的であったという．さらに，1920年代後半から登場した新興資本家が，既存の大工組織を吸収した住宅地開発会社を設立し，大規模の都市韓屋住宅地を造成することになる．

図7　土地区画整理事業によって整備された「龍頭（ヨンドゥ）地区」に建設された大規模な都市韓屋住宅地（『ソウル20世紀：100年前の写真記録』，2000）

当時，京城で活動した代表的な住宅地開発会社には，鄭世権（ゾン・セクォン）の「建陽社」，金東洙（キム・ドンシュ）の「共営社」，呉英燮（オ・ヨンソプ）の「呉工務所」，金宗亮（キム・ゾンリャン）の「京城材木店」などが挙げられる．なかでも，「建陽社」の鄭世権は，嘉会洞，仁寺洞（インサドン），城北洞（ソンブッドン），明倫洞などに，毎年約300棟の都市韓屋を建設し，「建築王」と呼ばれたという（「建築系から見た京城」，『京城便覧』，1929）．加えて，「呉工務所」と「京城材木店」のように，京城高等工業学校出身の建築家が運営した会社もあった（図8）．

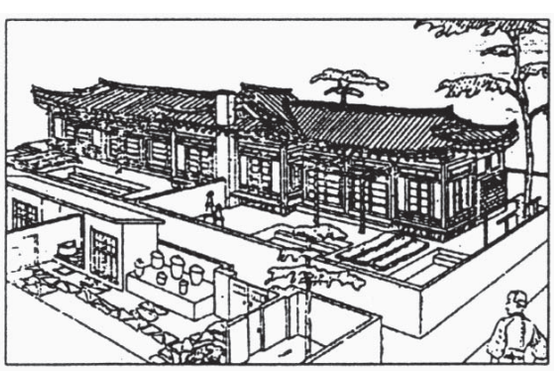

図8「呉工務所」の広告に載せられた改良韓屋の計画案（『朝鮮建築』，1947）

4. 都市韓屋の建築的特質と変容

4.1. 都市韓屋の平面形式

……内庭形の伝統的な生活空間の継承

都市韓屋は，先に言ったように，前近代の伝統的な韓屋の建築構成を継承しているが，商品住宅として不特定の居住者を受け入れるように一定の平面構成を持つことが特徴である．都市韓屋は，13～24 坪の床面積で，内棟（アンチェ）と付属室のみで構成されるＬ字型，コの字型のコンパクトな中庭型の平面形態が一般的である（図 9）．内棟は，板間である大庁を中央に配し，その両脇に内房（アンバン）と越房（コンノンバン）を設け，さらに内房に隣接して釜屋（ブオク＝台所）を置いてＬ字型の平面形式を構成している．このＬ字型の内棟は，京畿道（キョンギド）ソウル地方の民家の平面形式から伝わった特徴である（図 10）．また，一字型の門間棟（ムンカンチェ）は，大門を中心にした両脇に接客室の舎廊（サラン），あるいは使用人の部屋である行廊（ヘンラン），便所などを設ける．

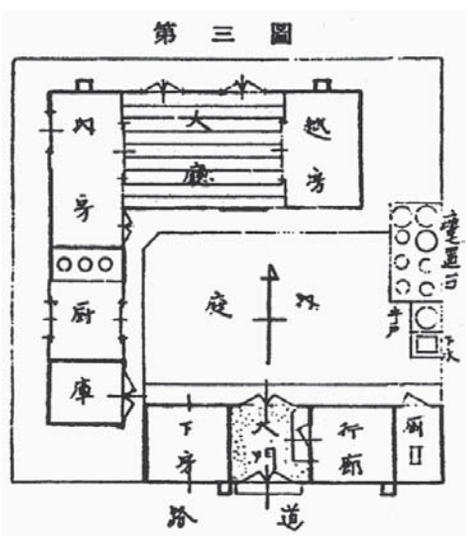

図 9　建築家朴吉龍のスケッチに見られる京城の都市韓屋の一般的な平面形式（『朝鮮と建築』，1941）

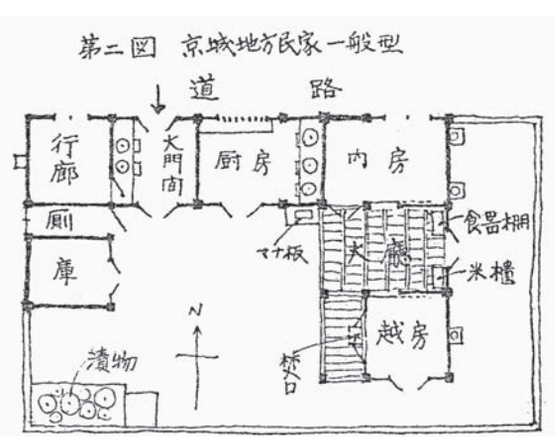

図 10　京畿道ソウル地方の民家を描いた今和次郎のスケッチ（『朝鮮部落特別調査報告』，1924）

図 11　コの字型の都市韓屋群が集まっている「北村」の全景（『韓屋現代住居学』，1990）

こうして，都市韓屋は，母屋としての内棟と，付属の門間棟で内庭（マダン）をコの字型に囲むような特有の平面形式で構成され，極めて開放感の少ない生活空間を持っている．この平面形式は，都心部の住宅地での大量建設を前提とし，伝統的な韓屋の平面形式を簡略化した結果という（図 11）．すなわち，内庭の外部空間によって生活空間をゾーニングする伝統的な平面形式が持続され，内庭を中心にして周りに棟を配する方法で都市韓屋の平面形式が成立されたのである（図 12）．加えて，内棟と門間棟の両方もＬ字型で向かい合うロの字型の都市韓屋が嘉会洞や桂洞，三清洞などの大規模な敷地で建てられたこともあったが，いずれにしても，コの字型の都市韓屋が典型的なものである．

都市韓屋において内房は，部屋のヒエラルキーが高くて，最も広い面積を持つのが一般的であり，温突（オンドル）の床暖房を入れ，基本的に夫婦の寝室として使われる．さらに，寒い冬の季節には，家族の食事や団欒，隣人と親戚のもてなし，裁縫，家事など，ほとんどの生活が行われ，内房を中心とする伝統的な生活方式を継承している．また，越房は，若い夫婦や子供の寝室で使われることが一般的である．

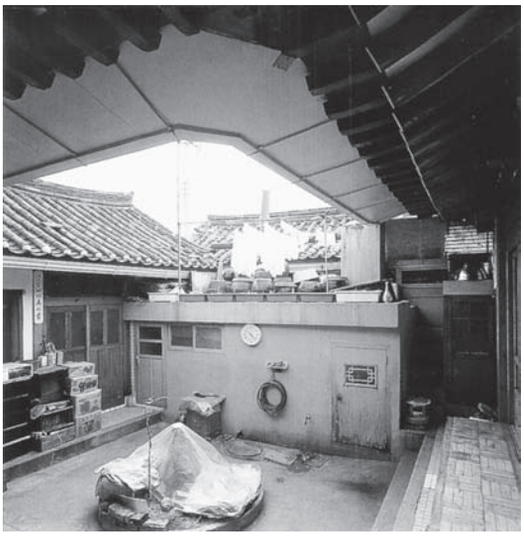

図 12　都市韓屋の中心空間である内庭（マダン）の様子（『韓屋現代住居学』，1990）

図 13　内庭側にガラス建具が設けられ，西洋式の応接室のようにした都市韓屋の大庁（『韓屋現代住居学』，1990）

これに対して，大庁は，暖かい季節に食事や団欒，接客など，内房の代わりに生活する場になり，先祖の忌祭祀や名節などの茶礼（チャレ）を行う象徴性を持つ空間でもある．このような大庁の使い方も，また伝統的な生活方式の特徴であるが，都市韓屋における大庁は，伝統の民家には見られないもう一つの特徴を持っている．それは，都市韓屋の大庁は，建設当初から内庭に面する側に建具を備え，屋内化しているのである．つまりそれは，大庁が寒い季節に使いづらい欠点などもあり，生活上の利便性を高めようとした結果である．

さらに，建具には，伝統的な韓紙（韓国古来の製造法で漉いた紙）ではなく，ガラスを用いるのが一般的である（図 13）．都市韓屋の建設期には，既にガラスや煉瓦，コンクリートなどの近代的な建材や，洋家具が普及されており，屋内化した大庁を，板の床上にカーペットを敷き，椅子やテーブルなどを置いて西洋式の応接室のように使ったこともあった．このような生活上の特徴は，生活の洋風化を目指した当時の生活改善運動の影響を示している．

さて，都市韓屋の平面形式の中で，最も中心になる空間は内庭である．前面道路から門間棟を経て，初めに進入する空間が内庭であり，内房を除いたすべての部屋は内庭から直接入るのが原則である．そのために，内庭は都市韓屋内の動線上におけるホールのような役割を担っており，さらに，水道や醤甕台（チャンドクテ）が設けられ，キムヂャン（キムチの漬け込み）や洗濯など，台所との関係の深い屋外の多目的な家事空間でもあるのが特徴である．

4.2. 都市韓屋の意匠……商品住宅としての装飾性

都市韓屋は，韓屋の建築形式に基づいた木造の戸建住宅とし，反りのある本瓦葺きの入母屋造の外観，柱に桁や梁を架けた姿が見える小屋組の大庁，柱上部の組物，朝鮮伝統の紋様が入った組子の建具や棚など，伝統的な意匠を備えている．また，それとともに近代的な素材である煉瓦，ガラス，トタン，タイルなどを

図 14　嘉会洞 31 番地一帯の都市韓屋の立面図（『ソウル市北村韓屋実測図面集』，2001）

用いているが，こうした近代性を表す装飾は，都市韓屋の前面になる門間棟の外壁に集中される．〈図 14〉に見えるように，基礎となる石の基壇の上に煉瓦積みや石ブロック積み，あるいはタイル張りの壁で，壁面の上部には，伝統的な紋様を入れた帯のような細長い意匠や窓枠が用いられている．さらに，屋根の軒先や，軒先から地面に下って至るトタン製の雨どいを設け，伝統の紋様とともに近代的な装飾が調和している．

このように，前面道路に面して一字型で建てた門間棟は，外部と内部の境界を区分する役割を担っており，伝統の紋様と近代的な素材との調和がとれた装飾性を表して都市韓屋の特有の町並を作り出しているのが分かる．加えて，都市韓屋は，朝鮮王朝時代の両班などの上流層の韓屋意匠を用い，商品住宅としての価値をより高めたという．

4.3. 移り変わる都市韓屋……新ライフスタイルの対応と「LDK」の生活空間への転換

都市韓屋の台所は，内房の床の下にある温突を暖める焚口を兼ねて，釜を据えるかまど（アグンイ）を設けた土間であり，朝鮮伝統の民家に見られる台所の構造を継承している．そのために台所の床のレベルは，内房の床より約 75 cm，さらに内庭の地面よりも約 35 cm 低い．また，台所の上部には，その段差を利用して内房から上がるようにした屋根裏の物置がある．

さて，こうした台所の構造は，家事労働上の不便性や非衛生をもたらした欠点などもあり，その改良が生活改善運動の重要な課題の一つになってきた．（図 15）しかし，台所改良の問題は，現代に至って温水ボイラーなどの床暖房設備の発達とともにようやく解決され，都市韓屋の居住者によって台所が改・増築される事例が増えている．残存する都市韓屋の事例を見ると，建設当初の台所の構造をそのままにして，タイルを張り，キッチンユニットを設けて立動式の台所に改築したことがわかる（図 16）．また，台所の床の高さを内房や大庁などの他室と同じレベルにした事例も多い．それは，台所から内房，大庁への屋内動線を確保し，家事労働の利便性を高めようとした結果である．

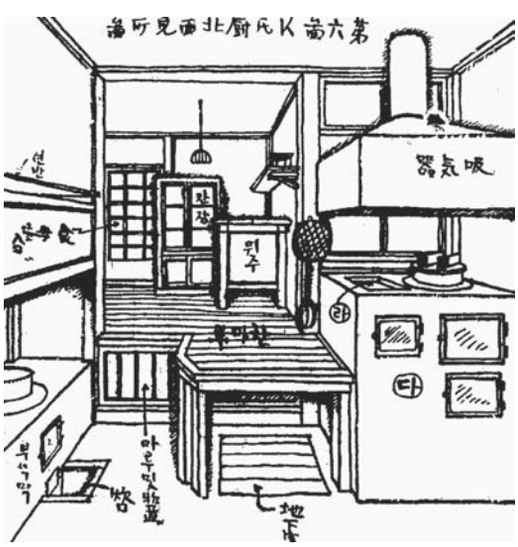

図 15　建築家朴吉龍の台所改良計画案（『東亜日報』，1932）

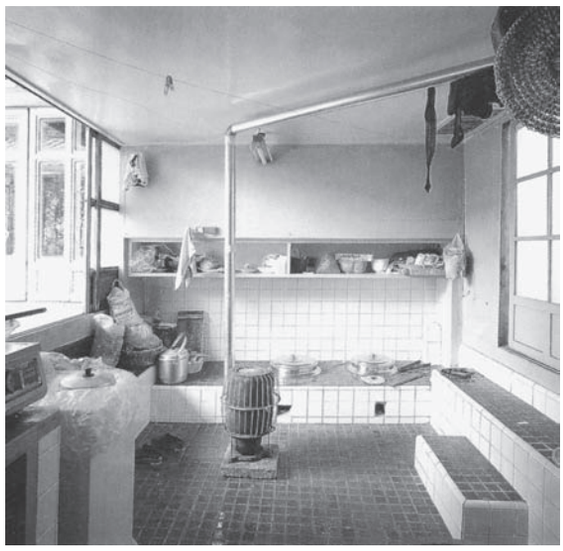

図 16　都市韓屋の台所の室内．建設当初の構造のままでタイルを張って衛生的に改善されるようにした．（『韓屋現代住居学』，1990）

ここで，1960 年代に土地区画整理事業によって造成された龍頭地区と敦岩（トンマム）地区に建設された都市韓屋を改築事例として紹介し，都市韓屋の変容を見てみたい．この二つの都市韓屋は，それぞれの地区に建てられ，2009 年の実測調査を行ったものである．

〈図 17〉の都市韓屋は，中年期の夫婦が両親と一緒に住んでいる事例で，およそ 20 年の長期間に渡り改築されてきたという．コの字型の基本的な平面形式をもつが，内房と台所の位置を交換し，棟の梁間方向を大きくしてトイレと洗濯室を屋内に設けている．また，台所まわりの空間を拡大してダイニング空間を確保し，大庁とともに一室となっており，板間の大庁の代わりに床暖房を備えたリビングのような部屋にした

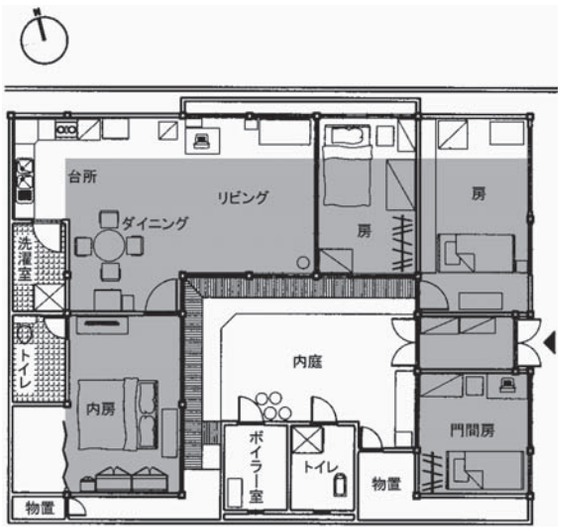

図 17　ソウル市東大門区祭基 1 洞 846-16 番地の都市韓屋
陰影の部分は元の平面形態（2009 年調査）

図 18　ソウル市城北区安岩洞 2 街 40 番地の都市韓屋（2009 年調査）

のである．加えて，内房は，専用のトイレやベッドを設け，夫婦寝室として使われている．

また，〈図 18〉の事例は，若い夫婦と息子が住んでいたが，移住時に現在の様子で改築されたという．〈図 17〉の事例と同様に，コの字型の平面形式で，棟の梁間方向を大きくしているが，内房を夫婦寝室にして，板間の大庁を無くして立動式の台所を新たに備えている．この都市韓屋に見られるもう一つの特徴は，内庭の上部に屋根を覆って屋内化していることである．屋内化された内庭には，壁掛け式の大型 TV を設けており，息子の遊び空間で使われ，主にリビングとして生活の中心になったことがわかる．また，既存の門間棟が玄関のような空間になり，各寝室とキッチン，トイレなどが全てこのリビングから繋がれ，まるで現代の住宅空間のように移り変わっている．すなわち，従来の都市韓屋の生活空間は，伝統の生活様式を脱して，いわゆる「LDK」を中心とする西洋式のライフスタイルにふさわしい生活空間へと変容されているのである．

5. 結び

本稿では，近代京城に登場した都市韓屋の成立背景と建築特質，その変容と事例を紹介してきた．都市韓屋の登場には，近代期に行われた京城の都市構造の変化，京城住民の急速な増加と住宅難がその原因になり，住宅地開発会社が朝鮮伝統の韓屋の住宅構造と生活様式に基づいた都市住宅として建てられたのを分かることができた．なお，都市韓屋が，近代京城の都心で一時的に建てられたことでなく，近代以後にも，マンション建設のブームが起こる 1980 年代以前まで，都市全域にかけて広く普及されたという点は特記すべきことである．

現在，ソウル市内には，900 余軒の都市韓屋が残存し，その一部は，「北村村」のように観光地化されていたり，文化登録財として管理されている．また，管理対象外になる大部分の都市韓屋は，一般の都市住宅として現代住宅と共存している．現存している都市韓屋の多くは，建設当初の平面形式をもつが，居住者の生活様式の変化とともに，内房や大庁の多目的な機能が移り変わっている．台所の改築によるダイニング空間の確保に従い，内房は夫婦寝室としてプライバシーの高い個室になり，季節に伴った大庁の用途がほとんど無くなっている．なお，屋内化された内庭が新しいリビングとして利用されている．

これらの都市韓屋は，新しいライフスタイルに対応しつつ，現代まで続けられた「生活近代化」の過程を如実に見せており，「伝統」と「現代」の両面性を持っている韓国近代住宅史の貴重な足跡として注目されているのである．